

## アジアの人々へ発言するときの日本人の対応の分析

「仕方がない」と「よかれ」の戦争

田中 孝志

### An Analysis of the Subject of Japanese people in Speeches to People in Asia ~ “Shikata-ga-nai (No-choice)” and “Yo-kare (Good for You)” ~

TANAKA Takashi

#### Abstract

This paper studies speeches about Asian Pacific war, which people in Asia heavily criticize as discrimination. The paper analyzes a process how speakers consider that people are subject to dominating and violating other people when addressing speeches such as “Shikata-ga-nai (No-Choice)” or “Yo-kare (Good for You)” about Asian Pacific war.

Key Word: Shikata-ga-nai (No-Choice), Yo-kare (Good for You), “Dominate and Violate, Small or Big eye, Subject of Communication”

#### [ 要約 ]

本論はアジアから批判を受ける戦争に関する発言がどのような過程を経て表現されているのかを分析するものである。特にアジア太平洋戦争についての日本のアジアへの行動を「仕方がない」や「よかった」とする2つを中心に人々が支配や加害への主体を持つことをどのように考えて批判されるような表現がされるのかを探っていく。

キーワード：仕方がない、よかれ、支配と加害、小さな目と大きな目、対応の主体

#### はじめに

昨今にあっても大臣の発言が批判され、辞任に追い込まれるという場合も後を絶たない。一連の戦争に関しての批判される発言と謝罪からは何かアジアの人々は人間の問題として日本人の人々に対応している、日本人の人々は国の制度としてアジアの人々に対応しているような感覚を得る。換言すれば、アジアの人々が対応する日本人の人々の不在である。その表現には「仕方がない」と「よかった」とするものがある。

序論：戦争の「仕方がない」とは

戦争で「仕方が無い」と言う場合、例えばアジア太平洋戦争では日本の国という大きな枠組みが日本の人々を徴兵して強制的に戦争へ行かせる。人々と国のこの関係は国が人々に行動を押し付けて人々が国に行動を拒否する自由がない、国から人々への発信は命令としてあっても、人々から国への発信はできない状況が日本の国と人々の関係にある。日本の人々からすれば人々が自分の意思に反して徴兵されて自由な意見交換がない場合を「仕方がない」というメッセージで国と人々の関係を表現するために発信する。徴兵は好むと好まざると国から人々への一方的意思疎通である。例えば徴兵により「四十四年十月には五百四万人で、男子人口の十四・六%となり、兵力動員の数をはるかに超えた数で、まさに「根こそぎ動員」であった」<sup>1)</sup>(大日本帝国の時代 2000: 192)や「小学生にまで少年兵および満蒙開拓少年義勇軍志願の割り当てが行われた」<sup>2)</sup>(太平洋戦争 2002: 325)と戦争が悪化するに伴い国が人々に要求する徴兵という圧力は人々に強制の度合いを増す。

この日本の国という大きな枠組みにより行動「させられる」小さな日本の人々との関係では自分が客体であり行動の主体は国となる。それと同時に「「国策」(戦争推進勢力の指示する政治的目標)に否定的な言論・出版・集会・結社をことごとく抹消し」<sup>3)</sup>(太平洋戦争 2002: 157)とあるように支配の客体であることを止めさせないための国の人々への圧力がある。この意味において日本の人々は戦争という行動を「させられる」人々、嫌だが「仕方がない」と無理矢理行動「させられる」人々になる。言い換えれば、人々は国という主体に支配されることで意思の通らない一方的な被支配者の構図を持つ。ここでホールの目の前の相手とのコミュニケーションが上手く行かなかった場合の例を紹介したい。彼は次のように説明している。

It wasn't until I realized that I had an identification problem and that the source of my discomfort was not in this other man but really in myself that I was able to make some progress in our relation. I had failed to draw a line separating me from him and was treating him as recalcitrant, somewhat obnoxious, bumbling part of myself that wouldn't behave. <sup>4)</sup>(Edward T Hall 2004: 89)

ホールは目の前の相手に線を引くことを忘れて目の前の相手を自分と同じように認識してしまうとことを意思疎通の失敗の原因だと指摘している。結果、ホールは目の前の相手の行動を“as recalcitrant, somewhat obnoxious, bumbling part of myself that wouldn't behave”と自分では決して成しえないと非難している。それはホールには自分の行動がある一定の枠組みを超えないということが基準となり、このときホールや目の前の相手の行動は行動を許す枠組みを主体にする客体として考えられている。言い換えれば、ある枠組みが主体となり自分の行動は客体として規制されることが目の前の相手との対応の根拠となる。それは目の前の相手にホールの行動を規定する範囲を主体にしたホールという客体の対応が説明されることであり、ホールの目の前の対応相手はホールの行動が確認される範囲とホールの行動の対応に付き合わされることになる。それはホールと目の前の相手との対応ではない。即ち、相手と自分の差を説明するのに自分の行動を許す範囲という主体と許される行動の客体を対応させ

ているだけであり、相手という主体が対応をこちらに求めていても自分の行動と範囲という客体と主体の関係により相手に対応するはずの自分の主体性は行動を許す範囲に任せて骨抜き状態で考えられている。それは自分の行動の範囲内を軸に、対応する相手の主体性を否定することにつながる行動である。

「仕方がない」と戦争について言うとき、それはあくまでも日本の国と西欧の国々との「ソ連を撃破して北からの「脅威」を除く必要が感ぜられる反面、他方では東南アジアおよび西南太平洋方面の資源を把握する必要性も生じ、そのためには米英蘭等の諸国との戦争をも回避できなくなってしまった」<sup>5)</sup>(太平洋戦争 2002 : 210) 関係上での日本の国の日本人の人々へ強制をともなう国との主従関係、例えば「戦争は「名誉」とされていたので、遺族には泣き悲しむ自由もなかった」<sup>6)</sup>(太平洋戦争 2002 : 327) など、を意味しても日本人の人々とアジアの人々との主体的対応は意味していない。戦争当時に非国民という周りに足並みをそろえない人々を非難することばがあったように、日本の国という大きな枠組みに飲み込まれることを対象にして小さな人々は行動することを前提に発言は成されている。その姿勢はアジアの人々に対する行動の被支配者を意味する。つまり、自分が客体であるのだから、そこにアジアの人々への支配関係での主体は考えられず、被支配者として客体となる理由だけが考えられる。それがアジアの人々に対応しようとする姿勢となる。

#### 戦争と「よかれ」

次に戦争を「仕方がない」に次いで「よかれ」と表現する場合があるが、「よかれ」とは何を誰がどう判断する事柄であるのか。「仕方がない」戦争を「よかれ」と表現するとき、日本人の人々はアジアの人々ではなく国という主体に対して「仕方がない」客体に位置している。するとアジアの人々と対応する行動の主体は日本の国となる。そして日本人の人々はアジアの人々への行動に対して自身が日本の国の客体であることから対応の主体とならずにすむこともできる。例えば、前出のホールは目の前の相手の行動を自分で成しえない行動として行動を規制する範囲を中心に“ I was able to make some progress in our relation ” と目の前の相手への対応を表現しているが、これでは相手の行動はホールの行動を許す範囲を中心に対応されてしまい、ホールは相手への対応の主体は自分自身ではなく、行動を許す範囲という主体を中心に相手の主体が対応することを推し量るということである。アジア太平洋戦争で言えば、日本人の人々が国の客体であることからアジアの人々を考える場合にアジアの人々は日本人の人々ではなく日本の国を対応の主体とすることになる。

自分の目線での行動を越える大きな目が国であるならば自分は小さな目を持つ。大きな目を持つ国が人々に行動を強制して被支配者の日本人の人々はアジアの人々に加害を加える。しかし、被支配者は支配という主従関係を日本の国と人々の間だけの出来事として捉え、その姿勢を海外に向けて考えてしまう。日本人の人々のアジアの人々への支配と加害の関係は日本人の人々の国に対する被支配者である側面からアジアの人々への支配と加害に対する主体性を国という大きな目の行動に対応させることができる。その関係で被支配者である日本人の人々はアジアの人々への対応をアジアの人々と日本の国の対応と意識し、いかに日本人の人々が支

配と加害をアジアの人々に加えようとも、日本の人々のアジアの人々への支配関係は日本の人々の主体性を抜いてアジアの人々には天災のように考えられ、同時にアジアの人々の主体性は日本の国に対応する姿勢として戦争は説かれる。アジアの人々に繰り返された支配と加害、例えば「日本の占領政策で目立ったのは、現地住民の虐殺や強制労働だった」<sup>7)</sup>(大日本帝国の時代 2000 : 187)「いたるところで中国人村落を襲って、食料を略奪し、女性を強姦し、虐殺する」<sup>8)</sup>(大日本帝国の時代 2000 : 156)「列車や関釜連絡船での警察官の朝鮮人の取調べは苛酷をきわめ、なぐる蹴るの暴行が行われ」<sup>9)</sup>(太平洋戦争 2002 : 252)など枚挙に暇がないが、これら支配と加害の行動は日本の人々の主体性を抜いて他人事としてアジアの人々と日本の国への行動の主体性に光をあててしまう。

そこには大きな目に小さな目が飲み込まれて行動の客体となることで、大きな目の国にアジアの人々が主体として対応するような責任論などもアジアの人々に対して表れてくる。結果、アジアの人々に対して行動の主体を国として考え、日本の人々が支配者として君臨している対応が理解されないことにつながっている。「よかれ」と戦争について「自衛権の発動」「五族協和」「東亜新秩序の建設」<sup>10)</sup>(太平洋戦争 2002 : 248)など様々な表現を用いて言うとき、それは小さな目を飲み込む大きな目を相手への対応の主体とする考であり、結局は大きな目に飲み込まれる支配関係を前提に日本の人々のアジアの人々への支配と加害への主体ではなくアジアの人々の主体を日本の国を主体とする対応と意識することへとつながっている。人々は大きな目の中で主体性を奪われると考えることで他者への対応の主体性を大きな目に任せてしまう。すると大きな目による枠組みを主体にする他者の主体的対応が自分のそれを抜いて考えられてしまう。それは対応への自他共の本来の主体性を奪い、アジアの人々の日本の人々への主体的行動を無視して国という大きな存在に飲み込まれることを自然発生的天災としてアジアの人々が主体的に天災に対応することを説明する行為となる。アジアの人々が日本の人々が予想もしないほどある種の発言に怒りを表す一理由に日本の人々の大きな目から物事をみるという対応の偏見が他者の行動を支配し加害を与えることに気が付いていないからだと筆者は考える。「仕方がない」や「よかれ」という表現を考える場合、自分が国に客体である確認が「仕方がない」で相手に対応する主体性を国との関係で考えて相手の主体性を生かしているという勘違いが「よかれ」である。まとめると、本論での考察点は以下の事柄となる。

## 論点

- 1) 「仕方がない」の対応の主体と客体はどう求められるのか。
- 2) 「よかれ」の対応の主体と客体はどう求められるのか。
- 3) 対等に対応するとはどうすることか。

## 意義

昨今では日本とアジアの関係はさらに密になってきている。特に日本とアジア諸国との関係は政治的には芳しくなくとも経済や文化交流のレベルでは活発であることが推奨されてい

る。経済や文化において豊かになることはどこの国でも奨励されることであろう。しかし、真に友好を保とうとすれば日本とアジアの国々の人々は対等でなければならない。問題が表面化するとき、一体誰が誰に対してどのような基準で対応を行っているのか。「仕方がない」と「よかれ」は過去の出来事の内容を主体に説明して、過去の出来事のようにならないことを主体にしている。別の言い方をすれば、過去の状況へ自分を入れていることと、自分を過去の状況に入れてから、入れてはいけない場合を模索し、2つは客体と、客体から行動を主体にすることで異なる。少なくとも、小さな目で命に対応するアジアの人々には戦争を「仕方がない」や「よかれ」と表現する日本側からの意見は小さな人々として対応しない大きな支配の目を持つ背後の客体と考えられてしまう。アジアの人々と交流しようとする場合、この箇所を分析することは今後のアジアの人々との関係改善に加え、日本人自身が従来のもので見方を考える機会となり、加えて国交を結んでいない国やまだ問題が表面化していない国々の人々と対応することを考える上で少しでも役に立てばよいと考える。

## 本論

### 1)

日本も侵略戦争をしようと思って戦ったのではないと思っている。しかし、戦争というのが始まれば、異常な精神状態になることはあるし、とくに第一線の人たちはいろんなことが起きて、よかれと思ってやったことでも、迷惑をかけることが多いと思うので、全体のことについてはある程度わびる必要があるけれども、しかし、日本だけが悪いという考え方で取り組むべきではないと思う。むしろアジアはそのおかげでヨーロッパ支配の植民地支配の中からほとんどの国が独立した。そして独立の結果、教育もかなり普及し、長いことヨーロッパとかかかっているアフリカよりはアジアのほうがはるかに識字率が高い。そのことが今日、わずか半世紀にしてアジア全体が大変な経済復興の勢いが出てきたわけだ。むしろ民族の活性化にもつながってきたと思うわけだ。あんまりなんか日本だけが圧倒的に悪いことをした、というような考えで取り組むべきではない。<sup>11)</sup>(侵略戦争に関する桜井環境庁長官発言 1994: 2)

まず、「日本も侵略戦争をしようと思って戦ったのではない」と、その支配関係での日本人の主体性はアジアの人々との対応に抜かされている。そして「戦争というのが始まれば」とあたかも対等の関係で日本人の人々とアジアの人々が対応するような行動が述べられている。これは一見して人間の素質を主体にして人類に共通の事柄を基準にアジアの人々に対応しているようだが、戦争は人類に降りかかる天災として人々に主体性がなく、日本人の人々が戦争をするという行動は日本の国との支配関係で人々が国という主体に飲み込まれる客体であることを全人類の共通としている。つまり、天災のように「戦争というのが始まれば」アジアの人々への対応に日本人の人々の主体性は組み込まれていない。その支配関係を抜かした客体として「とくに第一線の人たちはいろんなことが起きて」と天災を主体としての対応が表現され「よかれと思ってやったことでも、迷惑をかけることが多い」とアジアの人々への対応

は日本の国の主体性として考えられている。

次に「全体のことについてはある程度わびる必要がある」という表現であるが、ここで「全体」とは「日本も侵略戦争をしようと思って戦ったのではない」とあるように日本の人々がアジアの人々を支配しないことを前提にしている。本来「わびる必要がある」とは支配関係の中で加害を加えたアジアの人々への謝罪を意味するが、「全体」には「しかし、日本だけが悪いという考え方で取り組むべきではない」という但し書きが付いている。その理由には戦争の結果「アジアはそのおかげでヨーロッパ支配の植民地支配の中からほとんどの国が独立した」とアジアの人々の戦争への主体的対応が表現されている。しかし、それは日本の国が西欧の国を相手にした場合のアジアの人々で、アジアの人々へ対応する日本の人々の主体性は抜けている。

さらに、「教育もかなり普及し」「識字率が高い」「経済復興の勢いが出て」「民族の活性化にもつながってきた」と戦争という天災とアジアの人々が対応することが考えられている。ここで日本の国に対して日本の人々が主従関係を結ばされて狭い視野で物事を考えることが邪魔してアジアの人々への主体的対応が無視されている。つまり、発言は日本の人々は日本の国に対して被支配者であることを訴えたいがために支配する日本の国に飲み込まれることを前提にして、アジアの人々の対応の主体性をその原因に納めている。ゆえに日本の国が主体となる場合の対応の相手の国「ヨーロッパ」を引き合いに出して国と国との関係を述べている。換言すれば、「あんまりなんか日本だけが圧倒的に悪いことをした、というような考えで取り組むべきではない」とあるように日本の人々を対応の主体から抜いて日本の国との対応でアジアの人々が「よい」事柄を見つけ出す主体として考えられている。これでは日本の人々とアジアの人々との対応は明確にはならない。以下は上記発言に対する発言者の説明である。

#### 1.1)

わが国の侵略行為や植民地支配などが多くの人々に耐え難い苦しみと悲しみをもたらした  
ことへの認識を新たにし、深い反省のうえに立って、不戦の決意のもと、世界平和の創造  
に力を尽くしていくことである。本日の私の発言については不適切なものであった  
と考え撤回する。<sup>11)</sup>(侵略戦争に関する桜井環境庁長官発言 1994: 2)

この説明ではアジアの人々へもたらした「侵略行為や植民地支配」そして「多くの人々に耐え難い苦しみと悲しみをもたらしたこと」は「わが国の」という大きい目を主体とする行為として述べられ、そこに小さな目の日本の人々がどのような主体でアジアの人々を支配し加害を加えるということになるのかということへの認識が不明確である。「深い反省のうえに立って」いてもどのようにして反省するのかの方法が明確でない限り、逆にアジアの人々が日本の人々の行動に対してどのように支配され被害を受けたかを日本の人々が理解しているのか「不戦」を日本の人々がどのように考えるのかという不安をあおる。

2)

日本でいう大東亜戦争（太平洋戦争）というものが、侵略を目的にやったか。日本がつぶされそうだったから生きるために立ち上がったのであり、かつ植民地を解放する、大東亜共栄圏を確立することを、まじめに考えた。（日本の状況を）そこまで持ってきた諸外国が問題だった。戦争目的そのものは当時としては基本的に許される正当なものだった。日本の軍隊があちこちでやった虐殺、放火、破壊をしたり、慰安婦問題とかは……。私は南京事件というのは、あれ、でっちあげだと思う。私はあの直後南京に行っている。いずれにせよ、そういうことは戦争に伴う悪であり、これは「絶対に悪い」というのはその通りだ。それを侵略行為というなら、それはまあ言えるが、日本は、そこを領土にしようとしたのでもないし、そういう所を占領したのでもない。<sup>12)</sup>（永野法相の発言 1994：2）

この発言では戦争は「日本がつぶされそうだったから生きるために立ち上がった」と日本の国としての諸外国への態度が示されている。そして、その理由は「そこまで持ってきた諸外国が問題だった」と日本の国が西欧の国々を相手にした場合が示されている。その場合、日本の国が主体となり「諸外国」に対応している。即ち、日本の人々は「諸外国」を相手にする国の行動に戦争をさせられる被支配者という客体となることが分かる。そして、その戦争の目的「植民地を解放する、大東亜共栄圏を確立すること」という主体となる日本の国がかかげる考え「当時としては基本的に許される正当なものだった」が述べられているが、それは中国の人々に対応する日本の人々ではなく国を主体とする考えである。中国の人々は「当時としては基本的に許される正当なものだった」という自然発生的な天災に対応する主体となる。そこに自然発生的な条件に対応する日本と中国のそれぞれの人々が存在する。両者での対応の主体は天災のごとき自然発生的な出来事であり、「日本の軍隊があちこちでやった虐殺、放火、破壊をしたり、慰安婦問題とか」中国の人々がこれらの天災に遭遇した場合に「日本は、そこを領土にしようとしたのでもないし、そういう所を占領したのでもない」と日本の人々が対応の主体になることを「でっちあげ」と否定している。このような表現に中国の人々と対応する日本の人々の主体性は抜かれている。初めの戦争を「絶対に悪い」とする説明では人々としての普遍性を、だが後の説明にはアジアの人々が天災への主体のように日本の人々のアジアの人々への支配関係は無いことを表している。

つまり、戦争での日本の人々とアジアの人々との対応で日本の人々が主体となることは日本の人々が被支配者であることから拒否されてアジアの人々という主体は日本の国と対応することになる。そこで日本の人々のアジアの人々への支配も加害関係も主体として考えられることはなく、そのためにアジアの人々は主体として日本の国に対応してしまっている。しかし、国と人々の一つの枠組みの中で客体として人々との対応を考えるその姿勢こそアジアの人々に慰安婦や三光作戦などの人々の人々への支配と加害をもたらすことの主体性への認識をしていないことを証明する。以下は上記発言への説明である。

## 2.1)

南京虐殺の事実があったことは否定しない。中国の方々におわびしなければいけない。太平洋戦争では侵略行為や植民地支配で、関係諸国の方々に耐え難い苦しみをかけた。正当化はできない。私の不適切な発言で、アジアの国々や関係諸国の人々に大きな衝撃を与え、弁護の余地はない。従軍慰安婦の問題は、当時の軍の関与のもとに多数の女性の方々の名誉と尊厳を深く傷つけた。心からおわびを申し上げたい。<sup>13)</sup>(法相をめぐる記者会見 1994：2)

ここでアジア太平洋戦争は「南京虐殺の事実があったことは否定しない」「中国の方々におわびしなければいけない」と中国の人々は対応の主体として存在する。では「侵略行為や植民地支配」を「アジアの国々や関係諸国の人々」「多数の女性の方々の名誉と尊厳を深く傷つけた」ことを考える主体は誰であるのか。特に慰安婦に関しては「当時の軍の関与」と説明されており、軍が主体となっている。それは日本の人々が軍という一つの組織に行動を支配される被支配者を前提としてアジアの人々の主体性を考える姿勢を意味する。もしも、本当に反省するところがあるとすれば、それは軍隊という国を主体とする大きな目に飲み込まれる小さな目を持つ人々が、飲み込まれることを前提とせずにアジアの人々との対応の主体を考えることではないのか。「中国の方々におわびしなければいけない」のは国が主体となる主従関係での客体として人々に対応を考えることである。それは単に国のシステムを非難するのではなく、「南京虐殺」「侵略行為や植民地支配」「従軍慰安婦」の行動の主体を中国の人々と日本の人々という主体で考えるということである。

## 3)

日韓の合邦というのは、当時の日本を代表していた伊藤博文と、韓国を代表していた(李朝の)高宗との談判、合意に基づいて行われている。形式的にも事実の上でも、両国の合意に上り成立しているわけです。もちろん、高宗が真の代表者であったかどうかには疑問があるし、合意を認めさせるための日本側の圧力はあったかもしれない。しかし、少なくとも、伊藤博文の交渉相手が李朝の代表者、高宗であったことだけは事実なんですから、韓国側にもやはり幾らかの責任なり、考える点はあると思うんです。もしも合邦がなかったなら、清国が、ロシアがあるいはのちのソビエトが一体、朝鮮半島に手をつけなかったという保証があるのかどうか。そういうことまですべて考えた上で、日本が朝鮮半島に出て行ったのは侵略以外の何ものでもない、日本が悪なんだ、という議論なら、まだしもこれは分かるんですがね。<sup>14)</sup>(藤尾文相の発言要旨 1986：3)

この発言では日本の国の代表の伊藤博文と韓国の国の代表の高宗という2人の国という大きな枠組みの代表の「合意」や「形式的」な形で問題が考えられており、問題は常に「高宗が真の代表者であったかどうか」という大きな目に着眼点が置かれている。即ち、韓国の人々は日本の人々により支配されるし被害を受けたという日本の人々と韓国の人々の問題は



考えられておらず、対応において人々は両方の国を主体としている。例え、諸外国が「朝鮮半島に手をつけなかったという保証があるのかどうか」という国と人々が対応する条件でアジアの人々に戦争を説いていても、依然としてそれは韓国・朝鮮の人々と国々との対応で、ましてこの条件は基本的に日本の国と諸外国の関係を意味し、日本人々と韓国・朝鮮の人々の対応は除外されてしまう。

また、発言の後半部分には韓国の責任が「清国が、ロシアがあるいはのちのソビエトが」という諸外国と韓国・朝鮮の人々が対応することに求められて韓国・朝鮮の人々と日本人々という主体性での責任は無視されている。その姿勢で日本人々と韓国・朝鮮の人々への支配や加害は考えることができない。つまり、「そういうことまですべて考えた上で」とは日本の国と戦争当時の日本人々が主従関係を結ぶことを基準に国を主体として西欧の国を前提に韓国・朝鮮の人々との対応を考え、日本人々が支配への客体であると主張したいのだろうが、それは韓国の人々への支配と加害を人々が人々へ与える暴挙として考えなくても良いという事柄で終りにして、そのような状態にならないことを考えてはいない。付け加えるならば、そのような状態になることに甘んじて韓国の人々に与えた支配と加害を被支配者が被る天災として、その主体性を日本人々に無視している。

ちなみに同発言者は発言の意向を「自分の信念を述べたものだ、自分の方から釈明したり、何らかの行動に出ることはない」<sup>15)</sup> (罷免されてもいい 1986 : 1) と述べており、そこに小さな目を持つ人間が大きな目に飲み込まれるときには主体性を大きな目に任せて失うということが明確であっても、それは小さな目を持つ人々と人々との尊重を意味する普遍ではない。国が主体となり人々が行動することを条件として人々への対応を主張する典型である。

#### 4)

南京で大虐殺を行ったといわれるが、事実ではない。中国人が作り上げたお話であり、嘘だ。あなた方(米国人)こそ、日本に原爆を落とし、二〇万～三〇万人を殺したではないか。<sup>16)</sup> (日本を決めた政治家 2001 : 131)

この石原東京都知事の発言では南京と原爆という2つの事柄が述べられている。先ず、南京大虐殺は「中国人が作り上げたお話」で「事実ではない」「嘘だ」とある。この論理からすると中国の小さな目を持つ人々が南京大虐殺という殺人を被ったことが否定される。では、原爆ではどうか。「二〇万～三〇万人」の小さな目を持つ人々が殺されたことに対して「あなた方(米国人)こそ」という米国の殺す人々が存在する。後者において前者に無いことは人々と人々の対応である。前者の南京大虐殺では被害を受ける中国の人々に対して加害を加える日本人々の主体が「嘘だ」とされているのに対し、後者では米国という主体と日本人々という殺される数の上での客体が持ち出されている。

原爆は確かにと主体として人々が主体の人々にもたらす行為として非難される行動である。しかし、原爆を中国の人々に対する南京大虐殺への反論として持ち出しても、そこには原爆のように人々が主体として被害を受けることを考える加害を加える主体がない。そこで日本人々

に主体性のない南京大虐殺は「中国人が作り上げたお話であり、嘘」と表現されている。上記発言者は「政治は往々己の利益のために非人間的、非文化的なことを含えてもする」<sup>17)</sup>(日本を決めた政治家 2001 : 132)と政治を主体に「一か月余りのうちに三〇万人もの市民、捕虜を殺すことができたのか、「南京大虐殺事件」の実態とはどのようなものであったかを検証すべきだ」<sup>17)</sup>(日本を決めた政治家2001 : 132)と指摘するように中国の人々に対して日本の人々が主体性を持つことを初めから拒否して大きな目の天災に飲み込まれて客体となることが中国の人々には当然であるかのように考えている。ゆえに米国の人々には日本の人々を飲み込まれる客体として対応させて原爆を説き、アジアの人々に対しての支配と加害への主体としての対応は無視できる。

南京大虐殺を「嘘だ」と原爆を引き合いに出すとき、殺される人々は理論から現実を収束して考えられるものではなく、現実から考えられるところで意味を為す。日本の人々が殺害されたということを強調したいがために発言は南京大虐殺及び原爆を殺人の規模という理論として考えている。米国に対応する主体の日本の国に日本の人々は被支配者の客体となる。その主従関係を理由にするがゆえに中国の人々への支配と加害の主体を抜いた日本国と米国の枠組みで南京虐殺は処理されている。

人々の命はここで言うまでもなく大切である。ちなみに原爆で亡くなった数十万という人々の命は主体としてあり、そこには「強制連行などによって広島で働いていた朝鮮人被爆者、被爆後にアメリカに帰った日系米国籍所有者」<sup>18)</sup>(太平洋戦争2002 : 403)も含まれる。そのように発言で明言していないからではなく、人々を主体として考えていないその論理がおかしいのである。繰り返すが、原爆は人々という主体が人々という主体への対応として非常に非人道的である。

## 5)

当時、朝鮮人の人たちが日本のパスポートをもらおうと、名前の所にキンとかアンとか書いてあり、「朝鮮人だな」といわれた。仕事がちにくかった。だから名字をくれ、といったのがそもそもの始まりだ。<sup>19)</sup>(創氏改名は朝鮮人が望んだ 2003 : 3)

この発言は2003年当時の麻生自民党政調会長のものである。創始改名、即ち、「創始改名令は一九三九年(昭和十四年)十一月十日に発令され、強制的な実地は、一九四〇年(昭和十五年)二月十一日を期して強行された」<sup>20)</sup>(半分のふるさと 1994 : 118)について述べられているが、まず、全体から韓国・朝鮮の人々を支配し加害を与えたという意識はまるで垣間見ることは出来ない。韓国・朝鮮の人々は「天照大神や明治天皇を祭神として各地に神社をつくって住民に神社参拝を強制する」<sup>21)</sup>(大日本帝国の時代 2000 : 186)「民族性を抹殺する同化政策が強行された」<sup>22)</sup>(大日本帝国の時代 2000 : 189)という支配行動に対して主体的に創氏改名を「ある人は、自嘲的にイヌコクマソン(犬子熊孫)と改名したという。つまり家門の名を捨てるのは、犬か熊の子孫」<sup>23)</sup>(半分のふるさと 1994 : 210)や「どうしても変えるというのですから南太郎とした人もいる。総督は南太郎です。やけくそですか

ら裕川仁と届けて不敬事件に問われる」<sup>24)</sup>(日本による朝鮮支配40年 1990:150)というように拒否したにもかかわらず、逆に、創始改名の成り立ちについては「朝鮮人の人たちが日本のパスポートをもらおうと」とあたかも韓国・朝鮮の人々が進んで日本の国に主体的にパスポートを取得するように考えられ、日本の人々が韓国・朝鮮の人々の対応の主体であることを抜いている。つまり、支配と加害の関係を韓国・朝鮮の人々に求めないことで、日本の人々の主体を抜いた韓国・朝鮮の人々が日本の国に主体として対応する図式ができあがる。それがまるで韓国・朝鮮と日本の人々との間に対等な関係が築かれているかのような印象を与えている。

さらに創始改名の理由については「先祖代々受け継いできた性を変えるというのは、祖先の骨を売り渡すことになる」<sup>24)</sup>(日本による朝鮮支配40年 1990:150)とあるように韓国・朝鮮の人々が主体的な意思に反して支配と加害を受けたにもかかわらず、自分の名前をもって「仕事がしにくかった。だから名字をくれ、といった」とここでも韓国・朝鮮の人々の主体的要望に日本の国が対応するかたちで考えられている。また「仕事がしにくかった」という表現も、日本の人々の支配と加害を抜いて、あたかも韓国・朝鮮の人々への支配と加害が天災であり勝手に韓国・朝鮮の人々が天災に対応するかのように考えられている。それは韓国・朝鮮の人々を天災への対応の主体にすることで日本の人々が対応の主体とならずにすむ方法である。

即ち、「朝鮮人だな」と韓国・朝鮮の人々が言われるとき、どのようにしても日本の人々との間に支配関係からの被害が生じるのであるが、発言者は少なくとも創始改名を韓国・朝鮮の人々が主体的に日本の国に従うと考えることで、その対応に日本の人々の主体性を入れずにすむ。言い換えれば、大きな目に小さな目を持つ人々が飲み込まれる客体であることに普遍性を求めているからこそ加害を天災として簡単に相手の主体性の問題として考えることができる。しかし、創始改名に限らず韓国・朝鮮の人々は「朝鮮人民の民族自決に対する意思表示」<sup>25)</sup>(日本による朝鮮支配40年 1990:65)の三・一運動などの行動に表れるように当然主体性を持ち反発した。その反発さえ日本の人々の主体性に対応させないがために韓国・朝鮮の人々が主体的に日本の国へ反乱を起こすと解釈されてしまう。上記発言者は発言の意図を次のように述べている。

#### 5.1)

朝鮮半島における過去の植民支配に対する認識は、95年の村山首相談話、96年の橋本首相談話において「いかに多くの韓国の方々の心を傷つけたかは、想像に余りある」と述べている通りで、その認識はまったく変わらない。<sup>19)</sup>(創氏改名は朝鮮人が望んだ 2003:2)

この説明では村山首相や橋本首相のことばをかりて「支配」への認識があるとされている。その引用からは韓国・朝鮮の人々が支配されると分かって、具体的に誰がそうしたのかは分からない。むしろ、この説明からは発言者の日本の人々と韓国・朝鮮の人々との間の支

配関係の主体を無視する無責任の自覚と考えることも出来る。つまり、発言者が日本の人々の主体性を抜いて韓国の人々の主体性を考える姿勢で問題が起こったということは確認されず、韓国の人々と日本の人々との主体的対応がないことが問題を生んでいるという認識も持っているのかは定かではない。まして「その認識はまったく変わらない」とあれば韓国を含む支配され被害を受けたアジアの人々にそれこそ日本の人々が戦争をどのように理解しているのかという不安を煽ることになる。そして同話者はその後、台湾について次のように述べている。

6)

日本は台湾に義務教育を持ち込んだ。結果としてものすごく教育水準があがり、識字率が向上したおかげで台湾という国は極めて教育水準が高く、今の時代に追いついていける。<sup>26)</sup>  
(麻生外相発言中国から非難 2006:3)

日本式の「義務教育を」強制的に「持ち込んだ」支配したことは、ここでは抜いて、持ち込まれることが自然発生的に当然であるがごとく理解されている。つまり、対応は日本の国と台湾の人々となり、それがあたかも台湾の人々が自然発生的に登場する義務教育を受け入れたかのように考えることを推し進めている。「義務教育を持ち込んだ」主体性は天災のようであり「結果としてものすごく教育水準があがり、識字率が向上した」と台湾の人々は進んで天災を受け入れる主体となる。それにより台湾の人々に対応する主体性は日本の人々ではなく日本の政策に置かれる。そして台湾の人々が主体的に日本の政策に迎合して日本の政策は正しいように説かれているばかりか、台湾の人々が主体となり日本の政策に対応することで日本の人々の支配も加害も考えられていない。

また、「台湾という国」を主体にして「極めて教育水準が高く」と教育が考えられてはいても台湾の人々のことには触れている様子うかがえない。台湾の人々の主体性は「日本は台湾に義務教育を持ち込んだ」と日本の国を主体に台湾の人々同士が主体として対応する発想の裏側に隠れてしまい台湾の人々が考える教育観は無視されている。そして「今の時代に追いついていける」と台湾の人々の努力ではなく日本の国の義務教育が台湾の人々を形作る対応の主体のように考えられている。前出の創始改名と同じく台湾の人々の対応の主体に日本の人々を置いていない。

この種の発言では日本の国や人々による支配や加害行動に主体性を抜くことに集中しようとすることで日本の人々だけでなく台湾の人々の日本の人々への対応の主体性も垣間見ることが出来ないばかりか、台湾や日本の人々を主体として直視できない偏見は人々が人々の主体として対応をしない主体感の差別を生む姿勢を浮き彫りにしている。

7)

過去数十年にわたって日中関係は遺憾ながら不幸な経過を辿ってまいりました。この間、わが国が中国国民に多大なご迷惑をおかけしたことについて、私は改めて深い反省の念を

表明するものであります。<sup>27)</sup>(政治家 田中角栄 1987 : 385)

この発言は従来、翻訳による誤解と多くの場合に解かれてきたがそうではないことも考えられる。中国側の周恩来総理は「前のことを忘れることなく後の戒めとす、といいますが、われわれはそのような経験と教訓をしっかりと銘記しておかなければなりません。中国人民は毛沢東主席の教えに従って、ごく少数の軍国主義分子と広範な日本人民とを厳格に区別して来ました」<sup>28)</sup>(政治家 田中角栄 1994 : 383)と述べているが、それは戦後の日本の人々は主体としてどう考えるのかという質問として受け止めることができる。その質問を考える人々の代表であるはずの田中角栄は日本の国と中国の人々との関係で答えた。人としてどう考えますか、という答えに国を主体として答えた。反省は人々と人々の関係を国という大きな目の国益で小さな目を持つ民益を中国の人々に対して持てなかったことを示すところにある。毛沢東や周恩来が日本に示した姿勢を田中角栄は小さな目が大きな目に飲み込まれないで生きる主体を持つ人々を模索するのではなく、小さな目が大きな目に飲み込まれて「仕方がなかった」という戦時中の客体の人々として対応している。

例え迷惑の意味が中国では「給中国国民添了麻煩と挨拶されたが、これは中国では道ばたでうっかり女性の着物に水をかけたことを詫げる程度の意味である」<sup>29)</sup>(政治家 田中角栄 1987 : 387)であろうとも、それは人が人へ主体として対応することである。中国の人々が求めたのが日本の国に飲み込まれた日本の人々が主体性を失い、対応の主体を中国の人々の主体性を無視して日本の国に設定したことを現在の日本の人々がどう認識しているのかどうかであるとすると、田中の発言は依然として日本の人々の中国の人々への支配と加害関係で日本の人々の主体性を抜いてアジア太平洋戦争とは水をかけられたアジアの人々は水をかける日本の国の天災を主体に被った対応と解釈していることになる。それは人々への支配を時局や場合による天災と意識する姿勢での対応となり、そこに人々と人々の主体的なつながりはない。言うならば、戦後を戦中の束縛から解放されたと別のスタートを切って戦中から分離した戦後を考えても、戦中から学んで戦後を考える姿勢を示していない。だからこそ支配関係を抜いた「給中国国民添了麻煩と挨拶されたが、これは中国では道ばたでうっかり女性の着物に水をかけたことを詫げる程度の意味である」<sup>29)</sup>(政治家 田中角栄 1987 : 387)と中国の人々は戦時中に日本の人々に主体として対応するにもかかわらず、その主体性は日本の国に対応させられて日本の人々が中国の人々に行った行動への説明として納得が行かなかったのではないのか。言うならば、中国の人々の「水をかけたことを詫げる程度の意味」とは、あまりに日本の人々が対応への主体性がないことへの疑問ともとらえられる。

## 結論

人間として相手の人間を考えるのに行動の枠組みを持ち出して人間を主体として対応しないことが原因であるように考えられる。それは小さな目が大きな目に飲み込まれる作用を普遍とすることで対応の主体性を抜いてものごとを説明することを容易ならしめる。

大きな目という狭い視野の中で小さな目が大きな目の範囲の外を観察すると小さな目は大

きな目の視野に偏って広げられて偏見を及ぼす。その偏見で観察する外界は主体的に対応する世界ではなくなってしまう。アジア太平洋戦争において「仕方がない」や「よかれ」と述べるとき、そこには先ず日本の国という主体に行動させられる人々が客体として存在することが条件となり、そこから外界の人々への対応は国が目標とする国以外の人々には自分の主体性を抜いた天災のように扱われ、その姿勢は外界の人々の天災に対応する主体性だけを問題にする。

「仕方がない」とは国という主体に支配される客体の人々を背景とした表現であり、その背景では支配は天災として付き合うものとなる。そして、国が主体となることから人々が客体としていて、国という主体に他の人々が主体として対応する行動は「よかれ」と表現する。前者の場合には対応の主体と客体は日本の国と日本の人々の支配関係に集中してしまい日本の国と西欧の国との前でアジアの人々への対応を考えることをおろそかにしてしまう。日本の国に飲み込まれる客体の人々は日本の国と西欧の国との関係でも客体である。当然、意識はアジアの人々への日本の人々の支配と加害を抜いて、アジアの人々が日本の国に対応する主体性が独立して表現されるのが後者である。アジアの人々に対して日本の人々は支配も加害も加えないのだから両者は別々に国を基準に対応する人々として表現されることになる。「よかれ」とは日本の国が主体でアジアの人々の主体がどう対応するのかという解釈である。付け加えれば、大きな目を持ってアジアの人々に対応している。教科書問題などで長年議論の中心となっている「侵略」か「併合」や近年の沖縄の「集団自決」という問題も結局は人々ではなく人々を飲み込む大きな枠組みの国が主体的に人々に支配や加害を加えたかどうかという人々を抜きにした支配と加害を天災とする問題として扱われている。

## 考えること

「長いものには巻かれる」とは巻くことを天災として巻かれることを客体とすると、対応する視野にあって人々は永遠に主体的行動で視野を広げる可能性を失う。ここから学ぶことが出来るのは一個人が相手との対応を考えるときには主体として相手の主体に対応しているのか自分が客体になっているのかを検討することである。例え、小さな目が大きな目という圧力に飲み込まれる場合にも小さな目は飲み込まれることを前提としなければ相手の小さな目と対応することも可能となる。ただし、それは客体としての同情ではない。すると、自分の事態を天災に対応する主体的客体と考えるのではなく、小さな目で大きな目という枠組みを用いない主体として自他の行動に着目することを考えることができる。「学んで考えざるはなお暗し」とはよく言ったものであるが、人々の対応を考える場合、戦争は「仕方がない」や「よかれ」と表現できるのであろうか。

## 参考文献

- 1) 由井正臣「大日本帝国の時代」岩波ジュニア新書、192、2002
- 2) 家永三郎「太平洋戦争」岩波現代文庫、325、2002
- 3) 家永三郎「太平洋戦争」岩波現代文庫、157、2002

- 4) Hall T Edward, BEYOND CULTURE, Kenkyusha, 89, 2004
- 5) 家永三郎「太平洋戦争」岩波現代文庫、210、2002
- 6) 家永三郎「太平洋戦争」岩波現代文庫、327、2002
- 7) 由井正臣「大日本帝国の時代」岩波ジュニア新書、187、2002
- 8) 由井正臣「大日本帝国の時代」岩波ジュニア新書、156、2002
- 9) 家永三郎「太平洋戦争」岩波現代文庫、252、2002
- 10) 家永三郎「太平洋戦争」岩波現代文庫、248、2002
- 11) 「侵略戦争に関する桜井環境庁長官発言」朝日新聞、2、1994、8月13日
- 12) 「永野法相の発言」毎日新聞、2、1994、5月5日
- 13) 「法相をめぐる記者会見」朝日新聞、2、1994、5月7日
- 14) 「藤尾文相の発言要旨」朝日新聞、3、1986、9月6日
- 15) 「罷免されてもいい」朝日新聞、1、1986、9月8日
- 16) 土屋繁「日本を決めた政治家の発言」角川書店、131、2001
- 17) 土屋繁「日本を決めた政治家の発言」角川書店、132、2001
- 18) 家永三郎「太平洋戦争」岩波現代文庫、403、2002
- 19) 「創氏改名は朝鮮人が望んだ」朝日新聞、3、2003、6月2日
- 20) 李相琴「半分のふるさと」福音館書店、118、1994
- 21) 由井正臣「大日本帝国の時代」岩波ジュニア新書、186、2002
- 22) 由井正臣「大日本帝国の時代」岩波ジュニア新書、189、2002
- 23) 李相琴「半分のふるさと」福音館書店、210、1994
- 24) 姜在彦「日本による朝鮮支配40年」大阪書籍、150、1990
- 25) 姜在彦「日本による朝鮮支配40年」大阪書籍、65、1990
- 26) 「麻生外相発言中国から非難」朝日新聞、3、2006、2月6日
- 27) 早坂茂三「政治家 田中角栄」中央公論社、385、1987
- 28) 早坂茂三「政治家 田中角栄」中央公論社、383、1987
- 29) 早坂茂三「政治家 田中角栄」中央公論社、387、1987